情報メディア 34−11
(1998. 11. 27)

人間用辞典の理想

国広哲弥
神奈川大学

意味論研究の立場から、人間が文章の意味を十分に解釈するのに必要な情報を提供する辞書の理想像を描く。外国人学習者に取って必要な情報もいれる。

(1) 見出し語に、語連結のように見えるが実は単一の語彙素であるものを逃さずいれる。
(2) 語の語彙体系の中での位置を詳述する。
(3) 意味格＋助詞の組み合わせからなる文型を記述する。
(4) 意味の定義では、動詞の選択制限を明示する。図解を積極的に用いる。
(5) 用例・連語(encoding idiom)・慣用句を区別する。
(6) 語句にまつわる一般常識を記述する。連想も含まれる。

An Ideal Dictionary for Human Use

KUNIHIRO Tetsuya
Kanagawa University

The author presents a plan of an ideal dictionary for human use which is necessary for full interpretation of linguistic expressions. It includes information for foreign learners.

(1) Some compound morphemes must not be missed as lexemes such as 'konokoro.'
(2) The position of an entry in the lexicon is described.
(3) The sentence patterns composed of semantic cases and particles are described.
(4) Diagrams are essential part of definition of meanings.
(5) Encoding idioms must be fully described especially for foreign learners.
(6) The common knowledge associated with words and phrases.

人間用日本語辞典の構築のために筆者が現在考えていることを述べる。電子辞典作成のために少しでも参考になれば幸せである。人間が言語の意味解釈をする時、表面に現れない含みまで理解できるのが理想である。「もじり」の原文が分かるのがその一例である。

1 見出し語

形態素(連続)を見出し語とする時の基準は、それが語彙素(lexeme)をなしているということである。例えば「このころ」は連濁を起こしていないので、「この」＋「ころ」の二つの語の連続と考えられやすいが、類似形の「このごろ」が発話時点を含む時間帯を指すのに対して、「このころ」はその時間帯以外の過去あるいは未来の時間帯を指す点で、意味が異なる。そしてその意味は「この」「ころ」の意味からは出てこない。このような時、「このころ」は単一の語彙素をなすと考え、見出し語にしなければならない。同様にして、「事実」と「事実上」は意味が異なり、その異なりかたは「上」の意味からは説明できないから、

「事実上」も見出し語にすべきである。「あらゆる」と並んで「すべての」も見出しにしたい。翻訳の場合、両語ともに 'all' の訳語となる。さらに、「によって」「あいまって」「あっての」などの語形も見出し語にすることが考えられてよいだろう。

枠組み慣用句 (formal idiom)

慣用句の一部分に変項を含むものを枠組み慣用句と呼ぶ。これを従来の慣用句と並べて見出しとしたい。例は国広(1997)に見られるが、ここに2例だけ示してみる。

(1) 「A が[も] A なら、B も B だ」〈A も B も常軌を逸している〉(A と B は意味的に一対をなす名詞)： 親が親なら、子供も子供だ / 書くほうも書くほうだが、読むほうも読むほうだ。

(2) 「AA した」〈いかにも A らしい； 典型的な A の性質を持った〉(A は名詞)： 何とものどかな田舎田舎した風景 / 「歩く」はいかにも自動詞自動詞していると感じられる / 美人美人していなくても、人目を引く顔立ちでなければ興味が湧かない。

2 語の語彙的位置

見出し語になった語については、語彙の総体の中で他の語とどのような意味関係にあるかを記述する。この情報は、ディスコースの中での意味解析に役立つし、語義の正確な理解にも役立つと思われる。コンピューターでは、語彙体系 (lexicon) の中の関係部分を呼び出せるようにしておけばよいであろう。これは語彙体系が下に示すような意味関係に基づいて網羅的に関係づけられていることを前提とする。

(1) 類義関係： 類義にも幾つかの種類があるから、できればその種類も区別されているとよい。文体差、時代差、語義の差、和語･漢語･外来語などの語種の差など。

(2) 上下関係： 語の上位語と下位語。下位語は複数個あるのが普通で、それは互いに同位語の関係にある。

(3) 同位語：同一の上位語を共有する語の群。通常「意味分野」と呼ばれる。

(4) 部分全体関係：意味解析の時に特に有効である：「頭を刈る」=「髪を刈る」。

(5) 反義関係： 細かく見れば、反義(長い･短い)、逆義(売る･買う)、対義(東･西)の区別ができる。

(6) 場面関係：通常同一場面に存在するという関係にあるものを指す語： 西部劇 → 駅馬車、インディアン、保安官、酒場、馬、ピストル、など。

3 文型

動詞がどのような文型要素「意味格＋助詞」と結びつくかを記述する。意味格の基本的なものとして、行為者格、対象格、場所格、道具格、などが考えられる。表面的には同じ「名詞＋助詞＋動詞」でも、異なった意味格を帯びることができる： 部屋を探す (a) 対象格＋動詞； (b) 場所格＋動詞。

(1) 川で泳ぐのを見た： 場所格＋対象格＋およぐ。

(2) 双眼鏡で泳ぐのを見た： 道具格＋対象格＋みる。

この場合、「およぐ」の選択制限として [場所（水中）で] が、「みる」のほうは[道具

（望遠鏡・顕微鏡など）で]が必要である。

「あふれる」の文型：

(1) [場所から物が] 「目から涙が溢れる」

(2) [場所が]「水を入れすぎて湯船が溢れた」

(3) [物・人が場所に]「お客が店の外に溢れていた」

(4) [場所が物・人で]「道路は見物客で溢れていた」

(5) [場所に抽象物が]「顔に喜びが溢れていた」

(6) [場所が抽象物に]「港は活気に溢れていた」/「若者は元気に溢れていた」

「ほる」（掘る・彫る）

「ほる」：〈道具を用いて A の部分を取り出す〉

I（A が目標）[掘る] ＝ dig.

（A が対象格）： 芋を掘る / 穴を掘る(結果目的語)。

（C が対象格）： 地面を掘る。

「芋・穴」は本体「地面」の部分という関係にある。

II（B が目標）[彫る] ＝ carve.

（B が対象格）： 仏像を彫る / 版画を彫る。

（C が対象格）： 版木を彫る / 石を彫る。

I と II は同一の現象素に基づいている多義語をなす。

4 語義の定義

つねに類義語の比較に基づいて進める。動詞では、選択制限を明示するようにする。図示を積極的に用いる。多義語の場合は、多義同士の関係に注意を払って体系化する。多義相互間の意味関係については国広(1997)を参照。

5 連語

「連語」は、一般には「語連結」を指すことが多いが、ここでは、「語と語の結びつきが多かれ少なかれ固定しており、全体の意味は構成語の意味から理解されるもの」を指す。慣用句も結び付きは固定しているが、全体の意味は個々の語からは推定できない。アメリカの Makkai(1972), Fillmore et al.(1988) などの 'encoding idiom' と 'decoding idiom' に相当する。この連語の概念は従来の国語辞典にはなく、ときに用例として、ときに成句として記述されてきたものである。そのため記述が十分でない。今後はとくに外国人学習者のために充実されねばならない。例を示そう：

風呂から上がる / 電話をかける[入れる] / 床をとる[敷く、伸べる] / 抜けるように青い空 / 案内に立つ / 疑問を抱く / 記憶に新しい / 扇子を開く[閉じる]（「あける・しめる」とは言わない）。

6 百科常識

言語表現の意味の十分な解釈のためには、文字通りの意味理解だけでは不十分であり、語句にまつわる一般常識的なこと、連想されるものなどを知っていなければならない。「も

じり」の理解がその一例である。これは辞典と事典の融合を意味する。

(1) 有名文芸作品のタイトル： 吾輩は猫である / 虫めづる姫君 / ベニスの商人 / 赤と黒。

(2) 有名な俳句、詩。中国の詩：「春眠不覚暁」、「月落烏啼」。

(3) 古典の冒頭の一節：「山路を登りながら、かう考へた / 祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響あり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす / ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまりたる例（ことわり）なし。世の中にある人と栖（すみか）と、またかくのごとし。(方丈記)

(4) 相撲・柔道の技の名前。

(5) 囲碁・将棋の手の名前。

(6) 地名・人名にまつわる故事・来歴。

7 連想

(1) 言語連想： 音形(発音の似た語)、意味の近い語(類義語)など。

(2) 事物連想： 語が指す事物そのものにまつわる連想。伝説、俗信。
「閻魔大王」(嘘をついたら舌を抜かれる) / 便所(臭い) / 冬(寒い)。

(3) 場面連想： 春（花が咲く） / 演奏会(拍手、花束贈呈)。

【参考文献】

『岩波講座 言語の科学 3 単語と辞書』、岩波書店、1997.
国広哲弥(1997)、『理想の国語辞典』大修館書店。
『日本語学』1993年8月号、特集 連想の言語学。明治書院。
Fernando, C. (1996), *Idioms and Idiomaticity*. Oxford University Press.
Fillmore, C.J., P. Kay, and K.C. O'Connor (1988), 'Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: the case of *let alone*.' *Language*, 64/3.
Makkai, A. (1972), *Idiom Structure in English*. Mouton, The Hague.